

## 論文要旨

### 郁達夫小説に見られる西洋への憧憬——女性表象を中心に

范 文玲

1840年に起こったアヘン戦争以降の西洋との接触が、中国の近代化をもたらした。しかし中国が西洋を受容・吸収・消化する過程は極めて複雑であった。アヘン戦争敗北当時、中国人の目には西洋人が対等の地位を有する人間としては映っていなかった。1860年頃に起こった洋務運動においても、日清戦争（1894年～1895年）敗北後の戊戌維新変革運動においても、西洋の科学技術や思想を取り入れようとする人士と、中国の伝統思想を守ろうとする人士たちの対立していた。その対立の要因は儒教思想の存在であったが、1910年代半ばから展開された新聞化運動においてようやくその儒教思想が徹底的に批判され、本格的に近代の道を歩み始めるに至ったのである。このような政界の動向に連動して、文学界でも旧文学に反対して新文学を提唱する文学革命が起こった。西洋の文学思潮およびそれらを左右している哲学思潮が洪水のごとく次々と中国に押し寄せ、文学者たちは戸惑いながらも、各々が独自の基準で取捨選択し、自分のものとして吸収・消化し、自身の文学創作に反映させた。一方で、政界での対立と同様に、文学界でも新文学派と旧文学を守ろうとする守旧派との間で激しい論争が繰り返されていた。さらに、新文学派内部でも次第に分裂・闘争が起こっていくのであるが、文学者たちはそれぞれの主張や主義を有し、互いに衝突しながらも、共に文学でもって中国の近代化を推し進めようとしたのである。本論文の主役である郁達夫（1896年～1945年）は、そのような文学者の中の代表的なひとりである。

郁達夫は中国近代文学における代表的な作家のひとりである。1921年6月、東京大学在学中に郭沫若・張資平らと東京で創造社を結成し、以降1927年8月に離脱するまで、中心メンバーとして同社を支えた。1915年、『青年雑誌』創刊をメルクマールに新文化運動が起こると、数多くの文学結社が結成されたが、そのなかで最も影響力があり、最も代表的であった二大結社とも呼べるのが、文学研究会（1920年北京で成立）と、この創造社であった。創造社の最大の特色は、当時日本に留学していた学生により、日本で結成されたところにある。そのため、当時の日本の社会的背景がメンバーたちに多大な影響を及ぼし、受けた影響がそれぞれ作品に色濃く反映されている。そのひとつに、西洋文学・西洋思想からの影響があり、郁達夫文学を形成する重要な要素となっている。郁達夫が留学した当時の日本は、明治維新後の大正期にあり、西洋の思想・文化・文学が大量に日本に紹介された。郁達夫は大正期の日本という特殊な環境において、日本だけでなく、日本を通じて西洋をも見たのである。そして日本で吸収した“西洋”を自身の作品に反映させ、帰国後、文学でもって自国の近代化を先導したのである。そんな中国近代文学において重要な地位にある郁達夫は、西洋の様々な潮流が中国に一気に押し寄せ、せめぎ合う中、どのような取捨選択をし、その作品にはどのようなかたちで西洋が表れているのか、それを紐解くことは、郁達夫文学のみならず、中国近代文学およびその発展を理解するうえで、非常に重要且つ不可欠である。しかしその研究はまだ十分であるとは言えない。従来の研究では、いくつかのごく

限られた作品を対象に論じられてきた。本論文では、郁達夫の小説全体に対して、できる限り客観的データに基づいて郁達夫文学を分析・考察・解釈しようと試みる、筆者独自の研究方法によって、これまでの研究とは異なった角度・視点からアプローチし、先行研究の不足部分を補い、郁達夫小説に表れた西洋的要素つまり西洋文学の影響を受けたと思われる要素および郁達夫の西洋への憧れを、郁達夫のテクストに基づき、指摘することを目的とする。

本論文は序章・本文（五章）・終章により構成される。序章では、本論文の目的を論じ、先行研究の紹介を行った。第一章では、郁達夫の代表作である「沈淪」に見られる作者の西洋思想・西洋文学からの影響および西洋崇拜を、主人公の自殺という結末から検討した。第二章では、郁達夫小説で多用されている西洋言語に着目し、郁達夫小説の中国文体史における貢献を論じた。第三章では、郁達夫小説に描かれた女性の身体的・外見的特徴に着目し、そこに見える郁達夫の西洋崇拜を指摘し、続く第四章で、郁達夫と同じく留日経験のある創造社のメンバーである張資平、郭沫若、成仿吾、陶晶孫らによる女性の外見描写を分析・比較し、第三章で指摘した郁達夫小説における女性の身体描写をより明確に特徴づけた。第五章では、第三・四章に続いて、同じく女性である母親像に着目し、マイナスイメージの母親像の描写に見える西洋文学からの影響を指摘した。そして終章で、本論文全体を通しての結論と、今後の課題を呈示した。

本論文は、従来の研究で指摘されてきたもの以外の様々な角度から郁達夫小説に見られる西洋的要素を指摘してこれまでの研究の不足部分を補い、郁達夫がいかに西洋文学・西洋思想から影響を受け、それを自身の作品に反映させ、中国の新文学をリードしようとしていたかを、より立体的に映し出した。しかし郁達夫は、ただ闇雲に自身の作品に西洋的要素を取り入れていたわけではない。例えば、同じくロマン主義の影響をうけていても、郁達夫はロマン主義美学の“優美”を、郭沫若は“崇高”の特徴をそれぞれ受容している。本論で論じた女性の外見描写においても、郁達夫はいち早く西洋的な美を取り入れてはいるが、創作初期においては「健康美」は取り入れなかった。なぜ「健康美」を描かなかったのか。「健康美」を付与すれば必然的に元気で明るい女性像となってしまう、作品の感傷性が失われてしまうからである。1920年代後半から40年代にかけての、商務印書館によって刊行された近代の婦人誌のなかで影響力の大きい『婦女雑誌』における健康美の提唱・病的な美の批判に伴って、郁達夫小説における女性の病的な美が減り、健康的な女性が描かれるようになっても、ストーリーによって作品の感傷性は保たれていた。郁達夫は意識的に自分の小説における感傷性を追求した。これまでの研究でも、郁達夫文学における感傷性については度々取り上げられ、感傷性は郁達夫文学の中枢をなす風格であるとされている。ただ、その感傷性は、女性の外見、「沈淪」主人公の自殺など、各々が醸し出す感傷性であっても、注意して見ると、いずれも男性主人公に哀れみの目を向けさせるためのものとなっていることがわかる。つまり、郁達夫は、受けた西洋からの影響を自身の作品に反映し、中国新文学をリードしつつ、それによって自分の文学の風格が損なわれないように、“男性主人公の哀れみ”を表現することに利用できる西洋的要素を取捨選択して作品の感傷性を高め、自分の文学の風格を貫いたのである。